



説教要旨 「型破りな救い主」

ルカによる福音書 20章41～44節



「メシアはダビデの子だ」(41節)。この言葉の根っこには、“救い主とはダビデ王の働きを受け継ぐ者である”という意識があります。つまり、その人がダビデ王の働きを受け継いでいるかどうか、ダビデの後継者たるに相応しい歩みをしているかどうかによって救い主を判別できるという驕った思いです。

イエス様はここで、詩編 110 編の言葉を引用します。この詩編には「ダビデの詩」という標題がついています。イエス様はそこでダビデ自身がメシア、救い主を「わたしの主」と呼んでいることに目を向けさせるのです。ダビデ自身が、「わたしの主」と呼びかけている存在こそが救いの源なのであって、人間であったダビデ王が救いの源なのではありません。神が遣わす救い主は、あなたがたの《主人》なのであって、あなたがたが救い主を認めるとか認めないと認定しようとはおこがましいにもほどがある。イエス様はそう指摘するのです。

この時、イエス様の教えを喜んで聞いていた人々も数日後には、「十字架につけろ」と叫ぶようになります。イエス様の救い主としての歩みが、自分たちの期待していた“メシア像”とは違うことが明らかになったからです。彼らもまた、救い主を自分の価値基準で判定し、イエス様がその“メシア像”に合致しなかったことで、失望し、「裏切られた」とイエス様を断罪するのです。

私たちもこの問いの前に立たされています。今日の状況の中で、日々の生活の中で、悲惨な現実を目の当たりにするたびに、神様の恵みなどどこにあるのか、神の愛など見いだせやしない、と失望し、裏切られたような思いを抱いてしまいます。そのような時、私たちは自分自身を《主人》とし、自分の基準で本当の《主人》である救い主を判定しようとしているのです。

私は主人ではない。救い主に相応しいかそうでないかと判定できる者ではないということを認め、イエス様が実現して下さる救いを信じ、心を開いてそれを求めていくところに、私たちの思いや考えを越えた仕方で、新しい救いのみ業が示されるのです。